

陶淵明「責子」の『文術』について

北海道倶知安高等学校数学科 原田 牧夫

責子	白髮被兩鬢	肌膚不復実
雖有五男兒	総不好紙筆	
阿舒已二人	懶惰故無匹	
阿宣行志学	而不愛文術	
雍端年十三	不識六与七	
通子垂九齡	但覓梨与栗	
天運苟如此	且進杯中物	

「岩波文庫『陶淵明全集(上)』松枝茂夫・和田武司訳注 p.248~250」の訳は次の通り

白髪は左右の鬢を覆い、皮膚ももう皺だらけになってしまった。男の子は五人もいるのに、それもそろって勉強がきらいときている。長男の阿舒(あじよ)は十六歳にもなるが、無類の怠けものだ。次男の阿宣(あせん)はやがて十五歳を迎えようというのに、文章学問の道が好きでない。その下の雍(よう)と端(たん)は、ふたりとも十三歳だが、まだ六と七との区別もつかない。末っ子の通(とお)ももうすぐ九歳になるというのに、梨だの栗だのをねだるばかりだ。だがこれもまあ運命ならば、あきらめて、酒でも飲むことにしよう。

「年十三不識六与七」の箇所を「十三歳だが、まだ六と七との区別もつかない」としていますが、果たしてそうでしょうか。いくら勉強嫌いだからといって、十三歳にもなって「六と七との区別もつかない」はずはありません。「六と七との区別」は勉強で覚えるというより、生活・遊びの中で身に付いていくものだからです。じつは「識」には、「見分ける」という他に「悟る・気が付く」という字義もあるのです。「年十三不識六与七」の訳は、「十三歳にもなるのに、六と七とで(たすと)自分の歳になることすら気が付かない」と解するのが正しいはずで、……父子の会話の中で、「おまえたちが6歳の時に○○という出来事があったが、もうあれから7年もたつのだなあ」と言う父の言葉に対して、「アレレ？ボク今いくつだっけ」と聞き返す子ども。アンポンタンな息子に深いため息をつく父……：そういういたのどかな情景を想起させずにはお

ない、とても巧みな表現なのです。読み下すならば、「六と七とを識(し)らず」ではなく、「六と七を識(し)らず」が正しい！そういうわけで、この作品には、二×八＝十六 というかけ算以外に、十三＝六十七 という足し算も使われているわけですが、実は数に関する細工はこれだけではありません。以下に「責子」にみられる数遊びを紹介していきます。

本文中、数の箇所は次の枠のとおりです。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	責
運	子	端	宣	舒	有	髮	子
苟	垂	年	行	已	五	被	子
如	九	十	志	二	男	両	
此	齡	三	学	八	児	鬢	
且	但	不	而	懶	総	肌	
進	覓	識	不	惰	不	膚	
杯	梨	六	愛	故	好	不	
中	与	与	文	無	紙	復	
物	栗	七	術	匹	筆	実	

数は 二 三 五 六 七 八 九 十 の計 8 個が登場しています。

「雍端年十三」の「十三」は、位取りの表記に直せば「二三」です。このことから

「雍端年十三」の「十」の一字に「十」と「一」という二つの意味を与えてみましょう。すると、この二つの意味を意識すれば、登場する数は、一 二 三 五 六 七 八 九 十 の計 9 個と解せます。ここで四の欠如を、「匹」↓「四」と変えて補ってみましょう。つまり「匹」を「四」の欠画表記(欠画文字の使用は、漢籍では珍しくはありません)のようにとらえなおすと、**いうウイットが潜んでいるのだ、と解してみるのです。**

すると当然 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 と出揃います。つまり出揃うようにするために

① 「十」の一字に「十」と「一」という二つの意味を与える

② 「匹」↓「四」と変える

という二つの操作を勝手に行ったわけです。しかしこの二つの操作が、作者の期待通りのものであることが次のようにしてわかります。

いま、①と②の二操作を込めた形でテキストを再掲します。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1	責
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2	子
苟	垂	年	行	已	五	被	上3	
如	九	十	志	二	男	両	上4	
此	齡	三	学	八	児	鬢	上5	
且	但	不	而	懶	総	肌	下1	
進	覓	識	不	惰	不	膚	下2	
杯	梨	六	愛	故	好	不	下3	
中	与	与	文	無	紙	復	下4	
物	栗	七	術	匹	筆	実	下5	

テキストの横10行を順に上1〜下5としましょう。

上4では

二十九〓十一

十〓十と一の二義〓十一〓十一

上5行では

八十三〓十一

さらに下5行でも

四(匹)十七〓十一

です。さらに

上3行と下3行をあわせた形で

五十六〓十一

であり、一二三四五六七八九十の総和である五十五が、見事に十一ずつに

分割された配置になっていることがわかります。この十一という数は①の操作で登場した十と一という数と符合しています。しかしここまでの議論は次の2点において不完全です。つまり

(あ) 五十六 \parallel 十一については、他の場合と異なり、上3行と下3行をあわせた形となっていて、同一行の和ではない。

(い) ②に関する符号が何も得られていない。

では次に(あ)と(い)の解決策を考えてみましょう。(あ)を解決するというのは、つまりは、五十六 \parallel 十一の計算を同一行で行えるような手段を探すことです。上3行の五の隣の「巳」は「巳(へび)」によく似ています。「巳(へび)」は干支の六番目です。であれば「匹」 \downarrow 「四」と同様に

③ 「巳」 \downarrow 「巳(へび)」

とする(い)と

「巳」 \downarrow 「巳(へび)」 \parallel 六

つまり

上3行内で

五十六 \parallel 五十六 \parallel 十一

となります。この解釈はなんと**3つの符合**を得ます。

符合の一つ目は、動物である「巳(へび)」と「六」という数が関係づけられているということと、②において動物に関する「匹」が数「四」と関係づけられているということです。

符合の二つ目は、もっと巧妙です。

五十六 \parallel 十一という上3行と下3行をあわせた形を、他の同一行の和に対抗させる手法は、上の五つの行と下の五つの行とを対比させると意識に基づいているわけです。ここで、我々が数に関して着目した箇所を、上の五行と下の五行とで対比させてみましょう。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	卍	
運	子	端	宣	舒	有	髮	卍	責
苟	垂	年	行	已	五	被	卍	子
如	九	十	志	二	男	兩	卍	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	卍	
且	但	不	而	懶	総	肌	下	
進	覓	識	不	惰	不	膚	下	
杯	梨	六	愛	故	好	不	下	
中	与	与	文	無	紙	復	下	
物	栗	七	術	匹	筆	實	下	

今度は、下段で数に着目した箇所該当する上段の文字と、上段で数に着目した箇所に該当する下段の文字とを太字で強調しています。いま議論した「五」「已」「六」の3文字に対応する太字は、上段の「年」と下段の「好」「故」です。「好」「故」の2文字は並んだ順にたどれば、「好故」つまり「故(しきたり)を好む」ということであり、これと「年」を合わせて考えれば、「年」に関する「故(しきたり)を好む」ということとなり、前述の干支「巳(へび)」**六**、の登場と符合します。残りの3つの太字「無」「与」「与」については後述することとして、**三つ目**の**符合**を得るために縦の列の数の和を考えましよう。

終わりから第3列目の「雍端年十三 不識六与七」中では前述の通り上の十三と、下の六十七**十三**とが一致します。このことは、縦の和をとるときには①のようには考えずに、「十」は十のまま扱うべきだ、ということを示唆します。この列は上下あわせると

十三十六十七**二十六**

です。一方3列目では、

「巳」↓「巳(へび)」**六**
「二八」
「匹」↓「四」

が登場しています。詩の内容から考えて「阿舒巳二八」の「二八」は二十八才ではなく、二×八**十六**才と解するのは当然です。

するとこの第3列では

という数が得られますが、これは先に述べた

十三十六十七〓二十六

と一致しています。

では最後に3つの太字「無」「与」「与」についてです。「与」は英語の *and* と同義。「与」の一字によって *and this place*（つまり「与」のこの場所もまた、上段と下段の対比において注目されるべき場所であるのだ、という意味合いを与えられていると考えて良いでしょう。つまり「与」がこの箇所配されることで、上段と下段を対比する見方への符合となって見方へは、よく知られていないわけです。では太字「無」の存在は何を意味するのでしょうか。

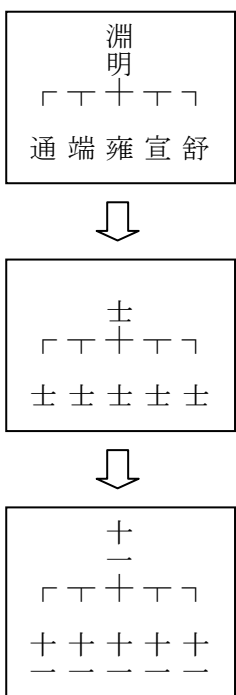
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の総和である五十五は、見事に十一ずつに分割された配置になっていました。「十」個の数と「十一」による分割、というのはどうも格好悪い。しかし「無」〓ゼロであれば、「十一」個の数 〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の和の「十一」による分割ということになるわけです。しかし「十」個の数と「十一」による分割では格好悪い」というのは、ここに至って彼が本当に〇使用の提唱をしているのだ、というこの論拠としては弱いと言わざるを得ません。じつは〇使用の提唱の符号は、我々の解読の端緒に潜んでいるのです。我々の解読は「十三」を位取り表記の「一三」に直すことから始まりました。そして**数の位取り表記が〇を必要とする要因の1つであること**は、よく知られている事実です(たとえば「百」や「百一」を位取り表記で表すことを考えてみてください)。

下4と下5の二行において、いままでに注目した 無・与・与・匹・七 の五文字以外を横にたどると、

「復紙文中実筆術栗物」〓「復紙文中実筆術慄物」

「紙文中」つまりこのテキストの中には「筆術慄物」が「実(ぎっしりつまっている)」であると解せます。「筆術慄物」とは解くと戦慄がはしるような凄「筆術」ということでしょう。つまり今までの結果意外にも他の凄い符合が潜んでいる、ということになります。以下でこのことについて探索していきます。

唐突ですが、説文解字(漢代)によれば「士」〓「十」+「一」です。「士」は男子。つまり「十一」〓「士」〓「男子」と解せます。「雖有五男兒」、つまり陶淵明には五人の男子の子がいます。そして彼も無論「男子」。つまり



このことは「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」という「十一」個の数の和を五個の「十一」に分割する」とと符合します。さらに五人の息子のうち雍と端の二人だけが同い年、

つまり双子であり、テキストと一緒に登場していたわけですが、我々の五つの「十一」についても、上4においてのみ「十一」が二つ現れていました。この二つの「十一」はテキストの「十」に「十」と「一」の二重の意味を持たせることによって生じたわけですが、テキストの「十」の箇所である上4行を左からたどると、「如九十志二男両」です。この七文字を両端から中心の「志」に向かうようにたどってみましょう。七文字の中心「志」に含まれる「心」を、両端から中心の「志」に向かうようにたどれ、という指示と解してみるのであります。まず

「如九十志二男両」

において指示と解した「志」の下の「心」の部分を除いてみると

「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」です。
さらに

「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」↓「如九十士」+「士二男両」
↓「如九十士」+「両男二士」

「両男」とは、てんびんばかりでつりあうようにまったくおなじ、である男子。

「両男二士」とは、そっくりな男子が二つの「士」に該当する、と解せます。このことは雍と端に二つの「士」を充てたとする我々の解釈と符合します。さらに「如九十士」は、「如九、十、十一」、つまり

「士」＝「十一」

だ、ということと解せます。

つまり**双子の雍と端は二つの「士」に該当し、「士」＝「十一」であるという**こととなり、我々の**推察と完全に符合**します。「両男二士」と「士」＝「十一」に対する符合はもう一つあります。前述の第3列と第5列の縦計二十六に対して、その間にある第4列については

「志学」＝十五（歳）

のわけですが、（これは孔子の「志学」に因んだ表現であり、「好故」と「年」とに符合していません。）さらに十五を表す「志学」の「志」に含まれる「士」を「十一」と解することでやはり縦計二十六を得るという符合を得ます。この場合の二十六の得られ方は、他の2つの縦列の場合とは異なり

「志学」↓「志学」&（志）の（士）↓十五十一＝二十六

という、「志」に含まれるところの「士」の二重使用に依存しています。一見すると不規則にも思えるこの二重使用は、前出の「両男二士」の「士」が双子の「士」を表していたこととの、つまりは2人分の「士」を表していたこととの符合によって正当化され、整合性を得ます。

説文解字（漢代）にあつては、「志」＝「之」＋「心」であり、「士」＋「心」ではないことには注意すべきでしょう。しかし陶淵明の時代すでに存在した隸書の表記では「こころざし」

は「志」であり、彼が「志」↓「士」+「心」というウイットを得ることは可能です。また、「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」に際して「志」に含まれる「心」が除かれたことは、前出の「復紙文中実筆術栗物」⇨「復紙文中実筆術慄物」において、「栗」↓「慄」としたのとも符合します。つまり「志」↓「士」において余った「心」が「栗」↓「慄」において使われているわけです。

ところで五人の子どもの名前には、次のような意味合いが隠れています。

舒 心中の思いをのべる⇨叙

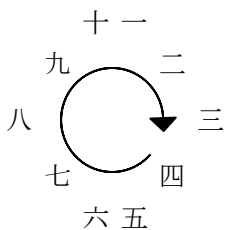
宣 述べる

雍 ふさぐ

端 はし

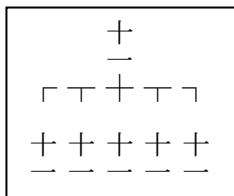
通 つらぬきとおす・すらすらと事がはこぶ・つかえることがないさま

雍・端は続けて読めば、雍端、「端をふさぐ」です。つまり「匹」↓「四」と「巳」↓「巳」に符合します。「匹」↓「四」の操作は、「二三五六七八九十」↓「三四五六七八九十」とする、つまりは「つかえることがないさま」にする操作でした。一方、「巳」↓「巳」の操作は、同一行での「五」+「巳」という足し算を可能にし、つまりは「すらすらと事がはこぶ」ようにした操作でした。しかし「二三四五六七八九十」では「つらぬきとおす」ことにはならず、さらに「端をふさぐ」ことが必要となったわけです。そして「一二三四五六七八九十」という「端をふさぐ」操作のかわりに、「二三四五六七八九十」、つまり「二三四五六七八九十一」という操作が行われた、というわけです。「端をふさぐ」操作が「一二三四五六七八九十」であったならば、結果として「一」と「十」という端が残ってしまいます。しかし我々の得た「二三四五六七八九十」すなわち「二三四五六七八九十一」では、「十」と「一」は一文字「士」として強く結びついています。この強い結びつきは、我々の「二三四五六七八九十一」が単なる直線的な配列ではなく、



という輪の配列を示唆するものであったことを気付かせます。輪の形に配されることで、「端」は完全に消滅します。こうすることで「端をふさぐ」という操作が完全に遂行されたこととなるのです。

以上の完全な符合の中で、とりわけ注目すべきは、

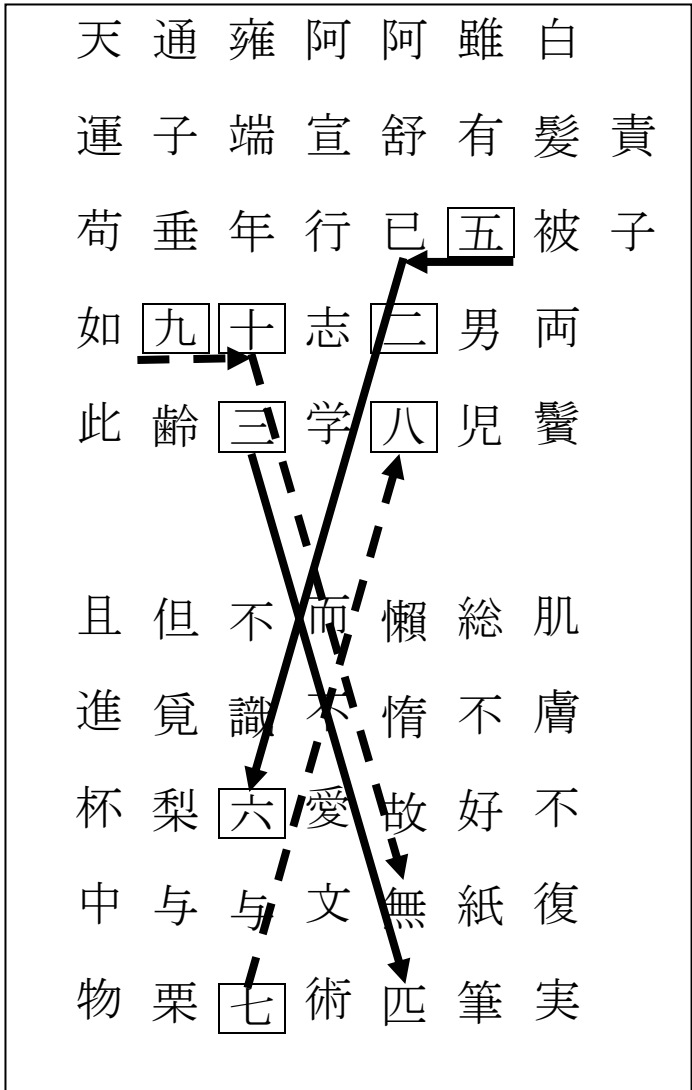


です。これは前述のとおり、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」ということと完

全に符合します。「責子」の作者が零に数としての市民権を与えるべきだと主張しているのは確かです。

0の意味合いを「無」として表記しながらも、0というモノを 一 二 三 四 五 六 七八 九 十 等の数の仲間を含めて扱う発想に作者は気付いていたことになりました。0にも数としての市民権を与えることで、位取り表記が常に可能になる、というのは前述のとおりですが、「責子」の作者が残した位取りの例は「十三」↓「十三」だけではありません。最初の「十一」に「一」という意味を付加する操作において得られた「十一」は、「十」の右隣の「志」に含まれる「士」の姿と酷似しており、同様に「志」から「士」↓「十一」↓「一」として得られた「一」は、「志」の右隣の「二」の姿と酷似しているのです。「十一」と「士」、「一」と「二」という2組は、横棒の長さの僅かな違いに至るまで符合しています。

実は注意深く数の配置を眺めることで「十」に対してその位取り表記「一無」（つまり現代の「一〇」）を対応させていることも次のようにして解ります。



右に再掲するテキストにおいて、「三」から順に数をたどることを考えましょう。

まず「三 四 五 六」を「三 匹 五 巳」としてたどることにしましょう。「五六」とせずに「五巳」とするのは、これら二文字が隣り合わせに位置するからですが、せつかくまともな「六」もあるのですから、「巳」に「六」を続けて「三 匹 五 巳 六」とたどってみましょう。「三 匹 五 巳 六」は実線の矢印で示したようにたどられます。では次に同様のことを「七」以降についても行ってみましょう。「七 八 九 十」を破線の矢印で示すことにしましょう。「三 匹」と「七 八」については、上下左右の見事な対称を得ます。また、「五巳」と「九十」についても行の違いこそあれ、左右対称の配置です。では、これらのことを手掛かりにして、「三 匹 五 巳 六」と同様に「七 八 九 十」についても、もう一字だけ延長してみましよう。「五 巳 六」と同様の形に「九十」を延長すると、右のように「九 十 無」を得ます。こうして得られた「三 匹 五 巳 六」と「七 八 九 十 無」について考えてみましょう。

「三 四 五 已 六」というのは、「匹↓四」「已↓已↓六」を意識しているわけであり、そう解釈することで「三 四 五 已 六」の最後の二文字「已六」は「六」が二つ続くものと見なせます。では「七 八 九 十 無」についてはどうでしょうか。「匹↓四」「已↓已↓六」は、「二 二 三 四 五 六 七 八 九 十」をすべて揃え、さらに行の和を十一に揃えるために行われた操作でした。これらの揃える操作の中で「十」を「十と一」として扱ったのを思い出しましょう。すると

「三 四 五 已 六」↓「三 四 五 六 六」

には

「七 八 九 十 無」↓「七 八 九 十 一 無」

が対応することになります。そしてさらに「三 四 五 六 六」の「六六」に対応するのは、「七 八 九 十 一 無」の「十一無」だということになります。「六六」が「六」の連続であることを考えると

「十一無」||「十十」

つまりは、

「一無」||「十」

という帰結を得るのです。「一無」||「十」の提示に際して作者はなぜこのような手の込んだ方法を選んだのでしょうか。これほどの腕前を持つ作者であれば、もっと早い段階に提示するよくな設定が可能だったとしても不思議ではありません。

ゼロの概念を持たない読者にとって、「一無」||「十」はいきなり提示されて理解できるものではないでしょう。作者は「一無」||「十」を、「十三」↓「三」、「十一」↓「一」といった提示と、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」という十一個の数字という認識を経て初めて受容できるものと考えたのでしょうか。聡明な作者は、我々の解説が段階的に進むものだと行うことを十分に承知し、活用してもいるのです。実際、「三 匹 五……」と「三」から順に進む以前に、「二」と「二」の連鎖については「二」の発生箇所から始まる

「十」↓「十一」||「十」↓「二」||「二」

が得られていたわけです。「七 八 九 十 無」に「二」が付加される際に「七 八 九 一 十 無」ではなく「七 八 九 十 一 無」となるべきであることも、この連鎖から解りま

す。「一無」||「十」を得た解説者にとって、十一個の数字「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」のうちの「十」は不要になります。あるべき数字の個数は十一個から十個に減り、解説の端緒となった「十」↓「十一」は、新たな意味合いを帯びて「十一」↓「十」と回帰したかのようにも見えます。この時点で解説は一区切りを迎えます。

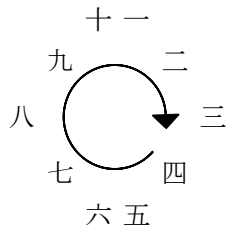
こうして〇にも数としての市民権を与えることで、位取り表記が常に可能になる、ということ

にも「責子」の作者が気付いていたことがわかります。「責子」が本当に陶淵明によって作られ、そして彼の生きた時代が西暦356～427年頃である」ことを前提とするならば、「この『数遊び』の存在は彼の意外な側面を語るに留まらず中国の数学史においても、重要なことです」。

田園での生活の中で、周囲に自分ほどの知識人が居るわけでもなく、また、零の使用による数の位取り表記を提唱してみたところで、然るべき地位の者たちの中にすらその値打ちを理解するほどの人物がいなかったのでしょうか。そうであれば自分の素晴らしい発案を詩に託したことにも納得がいきます。

「責子」の作者が「無」として記している数字は、今日では「〇」と記されます。しかしこの「〇」の表記は、陶淵明よりもずっと後になってからのようです。ところが実は我々は「無」
|| 「〇」に対する符号とも解せるものを既に得ているのです。

我々が今までに出会った数は、「無」と「一」から「十一」までの数であったわけですが、既出の数の配置



においては、輪を形成するのは「一」から「十一」までの数であり（「十一」は完成された輪には含まれませんが、輪の配置を導くために「土」という形で登場しました）、「無」は含まれてはいませんでした。今までの解読を通して、我々が「無」を数として扱うこととなったのは、「一」から「十一」までの数によってであり、言うなれば数としての「無」は、「一」から「十一」までの数によって形成されたわけです。このことを念頭に置くと「一」から「十一」までの数が「輪」を形成することと、「無」|| 「〇」とが見事に符合してしまいます。この奇妙な符合は、「責子」が陶淵明よりもずっと後の、数「〇」が使われるようになった時代に作られたものである可能性を考えさせずにはおきません。陶淵明よりも後の時代も含めて考えるとき、「これまで見てきた『責子』の暗号の構造的な性格、つまり符合によって解読が段階的に進展するという構造が、陶淵明の時代から1200年ほど後に作られたBacon || Shakespeareの暗号（拙著『薔薇の封印』をご参照ください）の構造に酷似していることに気がきます」[解読者が同一であるため、解読者の個人的妄想の所産である可能性も考えなければなりません]、そうではないことは理性的な読者であればすぐに納得ができるものと思います」。

先に得られていた

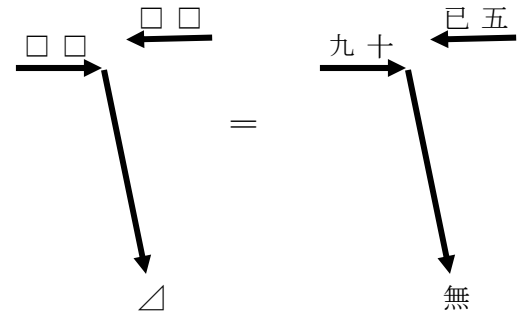
「三 四 五 已 六」↓「三 四 五 六 六」
「七 八 九 十 無」↓「七 八 九 十 一 無」

の二つに見られる微妙な差異に注目しましょう。「三 四 五 已 六」の最後の「六」が、「三 四 五 六 六」の最後の「六」にそのまま該当する一方で、「七 八 九 十 無」の最後の「無」は「七 八 九 十 一 無」の最後の数である「一 無」の半分にしかな該当していません。この意味における「九 十 無」の形態を「五已」の配置とともに記すと次の通りです。

「一無」を得た時と同様に、これらの「不」についても「数を順に数える」という操作を考え
てみましょう。4つの「不」の何文字後に数が現れているかを調べると

天	通	雍	阿	阿	雖	白	
運	子	端	宣	舒	有	髮	責
苟	垂	年	行	已	五	被	子
如	九	十	志	二	男	兩	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	
且	但	不	而	懶	総	肌	
進	覓	識	不	惰	不	膚	
杯	梨	六	愛	故	好	不	
中	与	与	文	無	紙	復	
物	栗	七	術	匹	筆	実	

これとほぼ同一の形態がテキスト中の5つの「不」に認められます。正確に言うならば4つの
「不」と、「杯」にふくまれる半分の「不」です。



A 白髮被兩鬢肌膚

B 不復實雖有五男兒總
①②③④⑤⑥⑦⑧

C 不好紙筆阿舒已二八懶惰故無匹阿宣行志學而
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱

D 不愛文術雍端年十三
①②③④⑤⑥⑦⑧

E 不識六與七通子垂九齡但覓梨與栗天運苟如此且進
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑

F 杯中物
①②

BとCにおいては、「⑤五」と「⑧八」の一致は、番号と数の符号に気付かせます。さらに番号と数の符号を考える以上、ゼロを意味した「無」は除外して考えることとなります。「⑥巳」は、「巳」↓「巳」||「六」とも符号します。しかし「⑦二」と「⑬匹」については、一致していません。しかし「⑬匹」の⑬はDの「十三」と符合することに気付きます。Cの⑬をDの2文字「十三」に対応させるこの符合は、「十三」の番号である「⑦⑧」も一まとめにして扱うべきであることに気付かせます。すると、Dの連続する「⑦⑧」に対応できるものは、Cの「⑦⑧」しかありません。この対応は番号同士の対応になりますが、その結果として余るCの3つの数「二」「八」「匹」||「四」は、Eの「②」「④」「⑧」に丁度対応するという符合を得ます。

以上の結果として、Eの「六」「七」「九」が余ることになります。実はこの「六」「七」「九」が次の解読への手掛かりとなるのです。もとのテキストを「六文字・七文字・九文字」ごとに改行し直します。すると4つの「不」のうちの3つと「杯」とは、次の通り見事に横一列に配されることになるのです。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩

白髮被兩鬢肌

膚不復實雖有五

男兒總不好紙筆阿舒

已二八懶惰故

無匹阿宣行志學

而不愛文術雍端年十

三不識六與七

通子垂九齡但覓

梨與栗天運苟如此且

進杯中物

「不」と「杯」の横並びは、先の「不」と「杯」への着目への符合となるのみならず、この新たな文字配列が横にたどられるべきである事をも示唆します。最後の列「進杯中物」だけが「六文字・七文字・九文字」の規則外であることから、この列が特別に扱われるべきであることも察しがつきます。

右上の「白」から横に追うと、

白膚男已無而三通梨進
を得ます。最後の「進」に当たったこの段階で、前述のとおり「進杯中物」を特別なものとして考えましょう。つまり

白膚男已無而三通梨

で一旦停止した上で、次に追う文字を「進杯中物」を手掛かりに考えます。「杯中物を進む」のではなく、「杯中物に進む」ことを考えましょう。「杯の中の物」を「杯」と同じ⑥に並ぶ3つの「不」に続く文字と解すと、⑥において右から順に「復」「愛」「識」を得ます。つまり

白膚男已無而三通梨復愛識

接続詞「而」に注意して解説すると

白膚男已無

而三通

梨復愛識

白い肌の男はすでに無く

そして三が通る

梨もまた知ることを惜しむ

『薔薇の封印』の読者であれば、これが何を意味するのかは、すぐに察しがつくでしょう。[これ以降の解説の確実な理解には『薔薇の封印』の知識が不可欠です。]

「白膚男」＝「白人の男」↓「Francis Bacon」

「三通」＝「3が通説になる」↓「first folio」の完成年が（本当は1620年であるにもかかわらず）1623年であるというところが通説になる]

「梨」＝「pear」↓「William Shakespeare」

ということ。ただ注意すべきは、成句（白居易による）で「梨園」といえば演劇界のこと。つまり

白膚男已無

而三通

梨復愛識

（あの）白人の男は既にこの世を去り
3が通説になってしまっている

演劇界もまた、秘密を明かしたがない

次に、⑥の「杯」と「不」以外の箇所を右から追うと

髪兒二匹子與

これでは意味不通。逆に左から追うと

與子匹二兒髮

(あの)方は2人の兒の髮に匹敵する。

「與」と「匹」とから、「與子匹二」までは何とか意味が通じますが、「兒髮」は不通。「兒」とは、そもそも頭蓋骨がまだ合わさらないような生まれたての赤子のこと。「髮」の上部「髟」は、それ自体で長い髪を意味する文字。生まれたての赤子には長い髪はない。「兒」を「髟」から「髟」を取り除く指示と解せば「二兒髮」↓「二友」となります。「友」||「拔」||「抜きん出る」と解せば「二友」は二つの抜きん出た才能(の人)、つまりは2人の天才。

與子匹二兒髮

←

與子匹二友

(あの)方は2人の天才に匹敵する

となります。⑥の「復」「愛」「識」以外にも同様に左から追うと、「栗垂」は不通ですが、残りは

阿八總被

となります。この「八」を以前の「巳」↓「六」の逆操作によって「八」↓「未」とすると

阿八總被

←

阿未總被

ああ、まだ総てには及んでいない

を得ます。これは、この後も解説すべき箇所があるという警告。「栗垂」を保留の上で、「阿八總被」の下を見ると、「兩鬢」の2文字が「髟」と「2」に関する文字であることから、「二兒髮」に対応していることに気付きます。このことから、「兩鬢」の「鬢」について、先程と同様に「鬢」↓「資」とした上で、「兩鬢」の配置を意識して、④⑤をまとめて縦2文字ずつ右から追うと

兩鬢實雖不好懶惰宣行文術六與九齡天運

← 兩賓實雖不好懶惰宣行文術六與九齡天運

← 兩賓實

雖不好懶惰

宣行文術

六與九齡天運

「賓實」は成句で、「莊子」のいう「名と実」のこと。「兩」は対を成すもの。「兩賓實」とは、つまり「名実ともにある」ということ。「賓實」という成句の存在は、先の我々の「二兒髮」|| 「二友」の符号になります。

名実ともに（あり）

怠けることを嫌うとはいいが、（堅物であるわけではなく）

「文術」を広め、（また自らも）行い、

「六與九」の齡で天運（によって死去された）

「六與九」についてはさておき、この箇所は長く、しかもかなりの部分がそのまま読めます。
「・・・天運」まで追ってさらに上の2文字も同様に右から追うと

垂栗

です。「栗」|| 「慄」は前出。

垂栗

←

将慄

いまにも身震いがくる

これは暗号設定の計り知れない精緻さに対する我々の意識を代弁したものだ。別の見方をするならば、作者の自慢です。つまり

いまにも身震いがくるでしょうよ

という意味。

「六與九」の齡は簡単に考えれば6+9||15歳。Francis Baconは65歳で亡くなっております、五十年不足しています。すると、㊦の右端に「五」を、㊨㊩には、まとまった配置で、下から上に「十年」を得ることに気付きます。㊦を「五」から右へ追うと

五筆學端覓如

となり不通。一方、㊨㊩は「十年」から左に追うと

十年且此

これは2文字ずつまとめたままで左から追うことで

十年且此

←
且此十年

しかもこの十年

という自然なフレーズを得ることがわかります。⑥は2文字ごとに分離されており、「學端」と「十年」、「覓如」と「且此」はそれぞれ2つのまとまった配置を成していることに着目して、「十年且此」↓「且此十年」と同様に

五筆 學端 覓如

←
五筆 覓如 學端

とします。さらに間に挟まれた「覓如」のみを逆読みにする（この逆読みの操作は次に符合を得ることになる）ことで

五筆 學端 覓如

←
五筆 覓如 學端

←
五筆 如覓 學端
五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだ

を得ます。先に得られた「且此十年」をこの前に据えることで、

且此十年

五筆如覓學端

しかもここ十年の五つの著作は
学問の端緒を探求するようなものだった

です。前出の「六與九」を「六十五」に直せば

兩賓實

雖不好懶惰

宣行文術

六十五齡天運

且此十年

五筆如覓學端

名実ともに（あり）
怠けることを嫌うとはいいが、（堅物であるわけではなく）
「文術」を広め（また自らも）行い、
六十五歳で天運（によって死去された）
しかもここ十年の五つの著作は
学問の端緒を探求するようなものだった

となります。この時点で残ったものは、①と②③の「阿舒」のみ。

④はすでに解読された②③の間に挟まれた位置にあります。先に間に挟まれた「覓如」のみを逆読みにしたのと符合するように④も逆読みにしましょう。つまり左から追う。

苟但七雍

志故紙

有肌

とりあえず7度だけふさいで

（あの方の）死亡を紙に記す

肌の有る

「七雍」の「雍」は前出の「雍端」、つまり「端を7回だけふさぐ」と解釈します。本来のテキストが10文字7列の配置であったことと、以前の「雍端」が、数の列を形成する操作に符合していたことを考えれば、

七雍

←

端を7回だけふさぐ

←

七列に記す

は容易に解ります。七列に記すことを「七雍」というのは、詩的であると同時にとても謙遜した表現ですね。ところが、

最後の「有肌」は、前出の「垂慄」を考慮すれば、どうみても

有肌

←

有肌慄

です。「肌慄」は成句で、身震いすること。この箇所も、先の「垂慄」と同じ類のもの。

有肌

鳥肌モノだな

最後に残されたのは

阿舒

ああ本音を言ってしまった

です。

苟但七雍

志故紙

有肌

阿舒

とりあえず7列だけ

(あの方の)死亡を紙に記す

鳥肌モノだな

ああ言ってしまった

「七雍」という謙遜の後で、自分の「文術」を自慢して「有肌」とするのは、確かに「阿舒」ですね。
以上を続けると次の通り。作者の警告と自慢といった、モノローグ的な箇所は注目に値します。

1

白膚男已無

而三通梨復愛識

與子匹二友阿未總被

兩賓實雖不好懶惰宣行文術

六十五齡天運將慄

且此十年五筆如覓學端

苟但七雍志故紙有肌阿舒

(あの)白人の男は既にこの世を去り、

3が通説になってしまっていて、演劇界もまた、秘密を明かしたがらない。

(あの)方は2人の天才に匹敵する「ああ、まだ総てには及んでいない」。

名実ともに(あり)怠けることを嫌うとはいうが(堅物であるわけではなく)、

「文術」を広め(また自らも)行い、

六十五歳で天運(によって死去された)「いまにも身震いがくるでしょうよ」。

しかもここ十年の五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだった。

とりあえず7列だけ(あの方の)死亡を紙に記す「鳥肌モノだな」「ああ言ってしまった」

こうして出来た文は、行の長さがまちまちですが、注意して並べ替えてみると次の通り見事に並びます。

2

白膚男已無
 而三通梨復愛識
 六十五齡天運將慄
 與子匹二友阿未總被
 且此十年五筆如覓學端
 苟但七雍志故紙有肌阿舒
 兩賓實雖不好懶惰宣行文術

この配列のモノローグの箇所を抜いて次のように追うと

白膚男已無
 而三通梨復愛識
 六十五齡天運將慄
 與子匹二友阿未總被
 且此十年五筆如覓學端
 苟但七雍志故紙有肌阿舒
 兩賓實雖不好懶惰宣行文術

3

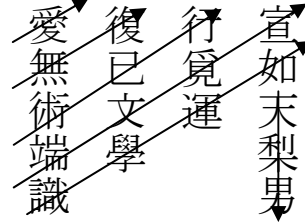
宣如天梨男
 行覓運
 復已文學
 愛無術端識
 (あの) 演劇の天才の男について、公表すること
 それには運が必要だ
 再びもう文学(の潮流)は
 暗号など含まないまともなものを
 好むようになってしまっているから

「無術端識」は、つまりは暗号細工のされていないまともなもの、という意味。

この3まで規則的に解読できること自体が、2のそしてつまりは1の正しさの符合になります。

さらに[1]の「苟但七雍」については、本来のテキストのみならず、[1]自体が7列を成していることに気付きます。

さらに[3]の配置についても



[4]

愛無復術

已行端文覓宣

識學運如天梨男

「行端文」は先へと進みながら文を正しくしてゆくこと。つまり一連の解読作業を指しています。「已」はやめるという意味。「已行端文」は解読をやめるということ。しかし「端」には、「正す」という以外にも「左右の均整がとれている正しさ」・「左右を水平にそろえて持つ」等という語義もあります。つまり「已行端文」には、文字を水平に横に追う読み方をやめるといふ意味も含まれているのです。このことは、今まさに我々の解読が、水平に文字を追うものから斜め追いに変わってきていることとも符合します。さらに「解読をやめる」＝「水平に横に追う読み方をやめる」と解すならば、このことは主要な解読の結果は[3]ではなく[1]なのだ、という主張をも含むこととなります。そしてこれは実際[1]と[3]の解読結果の重要性の違いと符合します。

愛無復術

已行端文覓宣

識學運如天梨男

二度とは作り得ないこの文術を惜しみ

解読をやめて、公開の機会を捜し求めなさい

演劇の天才の男のように文学の流行を見極めなさい

「運」とは、めぐりあわせのこと。つまりこの「學運」とは[3]で「復已(再びもう)」廃れたとされた「文術」が、文学(の潮流)のめぐりあわせによって再び流行するようになるとき、それを見極めて波に乗れということ。自作を大ヒットさせたあの演劇の天才の男のように流行

をつかめ、ということです。

最後に①の結果について吟味しておきましょう。

白膚男已無

而三通梨復愛識

與子匹二友阿未總被

兩賓實雖不好懶情宣行文術

六十五齡天運將慄

且此十年五筆如覓學端

苟但七雍志故紙有肌阿舒

(あの)白人の男は既にこの世を去り、

3が通説になってしまっていて、演劇界もまた、秘密を明かしがらない。

(あの)方は2人の天才に匹敵する「ああ、まだ総てには及んでいない」。

名実ともに(あり)怠けることを嫌うとはいうが(堅物であるわけではなく)、

「文術」を広め(また自らも)行い、

六十五歳で天運(によって死去された)「いまにも身震いがくるでしょうよ」。

しかも二十十年の五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだった。

とりあえず7列だけ(あの方の)死亡を紙に記す「鳥肌モノだな」「ああ言ってしまった」

「且此十年五筆如覓學端」つまりしかも二十十年の五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだった、ということから始めましょう。

William Shakespeareが1616年に死亡したことになっている一方で、Francis Baconの没年は1626年です。つまり彼は最期の十年間だけ、純粋にFrancis Baconとしてのみ生きたこととなります。

「学問の端緒を探求するよつな」Francis Baconの著作というのは、彼がライフワークとして企画した *Instauratio magna* (『大革新』)に関連する著作と解してまず相違ありません。The Cambridge History of English and American LiteratureのXIV. The Beginnings of English PhilosophyのFRANCIS BACONの項に掲載されている *Spedding* (Francis Bacon 研究の権威の方です)による著作リストにおいて、*Philosophical Works*として分類されているものうちから、*Instauratio magna* (『大革新』)に関連する、最期の十年に執筆もしくは出版されたと考えられるものを調べてみました。ある作品の一部が改めて1冊の体裁で出版されている場合もあるようなのですが、主要なものを整理してみると、確かに次の5つに絞られます

- A *Novum Organum* (『ノーブム オルガナム』) 1620
- B *de Dignitate et Augmentis Scientiarum* (『学問の発達(ラテン語版)』) 1623
- C *Historia Naturalis et Experimentalis* (『博物学と実験の歴史』) 1622
- D *Sylva Sylvarum* (『森の森』) 1627
- E *New Atlantis* (『新アトランティス』) 1627

Bについては、「此十年」以前に英語版が出版されており、またDとEは彼の死後に出版されたものであり、Eは未完の作品です。とはいえ、これらを「五筆」と呼ぶことは確かに可能です。New Atlantisが未完であり、そしてまた *Instauratio magna* が未完で終わったことは、「阿

「未總被」が「責子」の作者のモノログであるのみならず、Francis Baconの最期の心境を代弁したものでもあり、さらにそれはFrancis Baconの死が「責子」の作者にとつてどれほど深い悲しみを与えるものだったかを推測させずにはおきません。

Instauratio magnaは、Francis Bacon個人に留まらず、世界的に見ても「学問の端緒を探求するような」著作の代表的なものであることは有名です。また、「宣行文術」のうちの「宣文術」については、Francis Baconによる暗号研究もまた、有名なことです。「行文術」については『薔薇の封印』の暗号があります。『薔薇の封印』によれば、「三通」はNovum Organumに記された暗号でした。そして「與子匹二友」は無論William Shakespeare=Francis Baconと符合します。「梨復愛識」つまり「演劇界もまた、秘密を明かしたがない。」は、William Shakespeareの正体が謎に包まれていたことに符合します。

「責子」の制作年代については、Francis Baconの最期の十年間を「此十年」と記していること、さらにはFrancis Baconの死後1627年に出版された著作への言及から、「責子」が1627年頃につくられたことがわかります。

「六」「七」「九」という単なる3つの数の指示によつて、漢詩の中に英国の文化が突如出現するのは実に驚きです。「責子」は漢字の世界。一方『薔薇の封印』はアルファベットの世界です。両者は一見無関係に見えます。しかし「六」「七」「九」の出現以前に得られた「責子」の諸結果の中にも、アルファベットと関係のありそうな事項が隠れています。解説の冒頭で幾度も得られた数の和「十一」が、結局は前半の解説のテーマのような数であったことを思い出しましょう。そして我々が「十一」以外にも「二十六」という数の和を3度得ていたことを思い出しましょう。テキストの5列目において

十三十六十七二十十六

さらに3列目において

已十二八十四↓六十十六十四二十十六

さらに4列目で

「志学」↓「志学」&「志」の「士」↓十五十一二十十六

の計3つです。この「二十六」という数が英語のアルファベットの文字数と一致することに注目しましょう。このことを拠り所として、テキストの第3列と第5列にまず注目しましょう。第3列と第5列において、以前に得られた数を、順番に従ってアルファベットになおし、もとの文字の左に記すことにしましょう。ただし「無」については0（ゼロ）の字形に従って、文字Oを充てておくことにしましょう。6に該当した二つの漢字、六と巳については、どちらもFになります。

天	通		雍	阿		阿	雖	白	上1
運	子		端	宣		舒	有	髮	上2 責
苟	垂		年	行	F	已	五	被	上3 子
如	九	J	十	志	B	二	男	兩	上4
此	齡	C	三	学	H	八	児	鬢	上5
且	但		不	而		懶	総	肌	下1
進	覓		識	不		惰	不	膚	下2
杯	梨	F	六	愛		故	好	不	下3
中	与		与	文	O	無	紙	復	下4
物	栗	G	七	術	D	匹	筆	実	下5

いきなり Francis Bacon のイニシヤル F B が現れました。F B を特に意識して枠で囲んでみると、上段の J C H と下段の O D G については、J C H = Jesus Christ と GOD であることに気づきます。J C H と GOD は、どちらも Γ 型の配置になっています。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2
苟	垂	年	行	已	五	被	上3
如	九	十	志	二	男	兩	上4
此	齡	三	学	八	児	鬢	上5
且	但	不	而	懶	総	肌	下1
進	覓	識	不	惰	不	膚	下2
杯	梨	六	愛	故	好	不	下3
中	与	与	文	無	紙	復	下4
物	栗	七	術	匹	筆	実	下5

二つのΓ型の中にあるのは、キリスト、神、そして「三学」「七術」です。漢文の世界で「七術」というと、「韓非子」の「七術」を想起しがちですが、前出の JCH || キリストと神 || GOD とが関連する語であることを受けて、「三学」と「七術」についても、互いに関係の深いものとして把握すべきでしょう。「術」は英語では art。つまり「七術」|| seven arts。すると

「三学」 || trivium

「七術」 || seven arts || seven liberal arts || 七自由科

であることがわかります。三学と七自由科というのは、西洋の教育史などに必ず出てくる中世の基礎科目の呼び名です。詳しくいうと、三学とは、文法・修辞学・論理学 の3科目で、七自由科とは、この3つの三学にさらに他に 四科 || 算術・幾何・天文・音楽 を加えた計7科目のことです。キリスト・神・三学・七自由科 の4つの語が含まれている二つのΓ型は、**宗教と学問を象徴しています。**

二つのΓ型についてももう少し詳しく観察しましょう。「三学」つまり trivium は、「七術」つまり seven liberal arts の一部です。一方、J・C・H (キリスト) は GOD (神) の子ということになっていきます。先の陶淵明親子による「十一」の包含関係を思い出すと、子の5つの「十

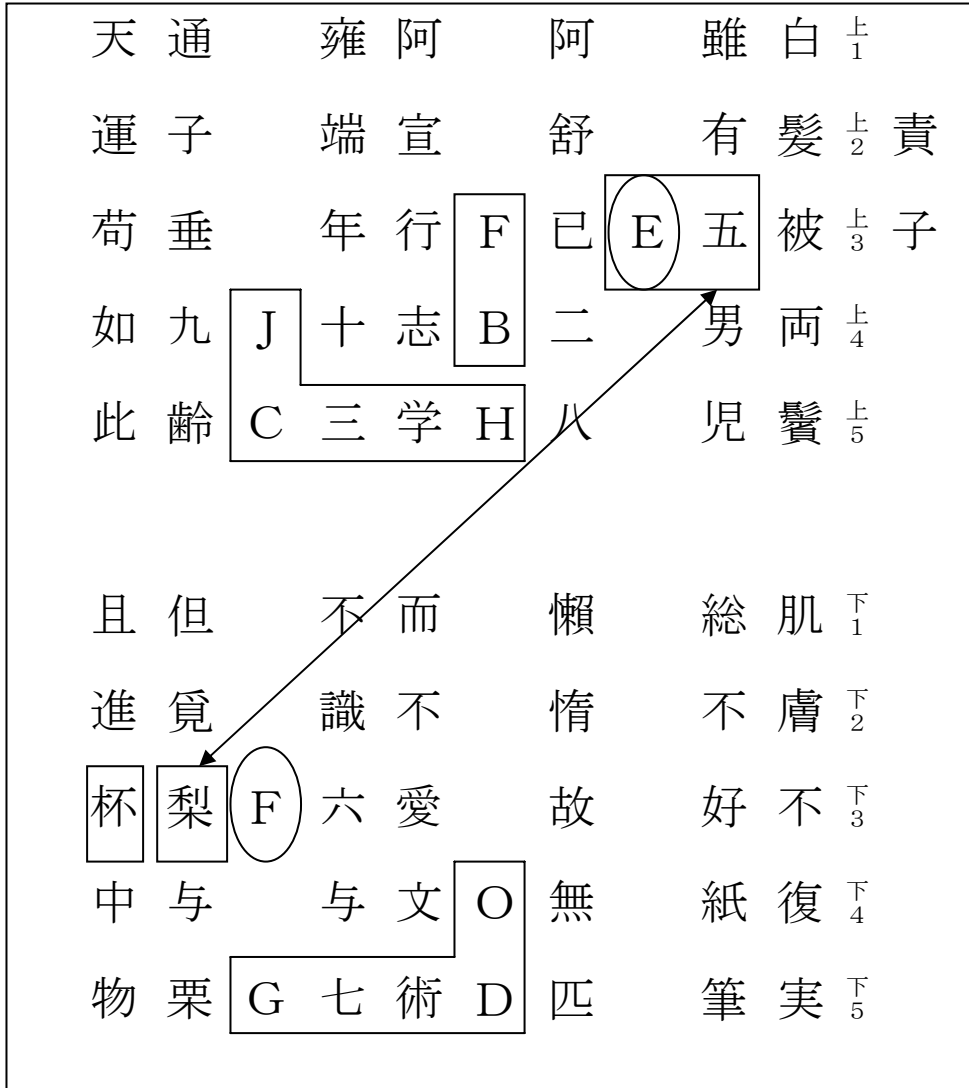
天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1	
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2	責
苟	垂	年	行	F	已	E	上3	子
如	九	J	十	B	二		上4	
此	齡	C	三	H	八		上5	
且	但		不	而	懶	肌	下1	
進	覓		識	不	惰	膚	下2	
杯	梨	F	六	愛	故	不	下3	
中	与		与	文	O	無	下4	
物	栗	G	七	術	D	匹	下5	

「一」は、その和が「十一」個の数の和五十五になるという意味において、親の「十一」に含まれていると解釈されました。つまり子が親に含まれていた、ということなのです。この関係をJ・C HとGODにも敷衍すると、J・C HはGODに『含まれる』と見なすこととなります。すると、二つのΓ型のうち、下のΓ型の中に現れている「七術」とGODとが、それぞれ上のΓ型の中に現れている「三学」とJ・C Hとを包含することとなり、二つの包含関係が符合します。キリストと神という語から、二つのΓ型を合わせると十字架の形になることに気がきます。ではキリストと神が記されているにもかかわらず、十字架が二つのΓ型に割れてしまっているのはなぜでしょう。割れた十字架はキリスト教の内部での何らかの分裂を連想させます。ここでΓ型が『薔薇の封印』に登場した時の状況を思い出しましょう。Γ型はpirate＝「海賊」としてG字型コースの中に出現しました。G字型コースには、ドーバー海峡をはさんで対峙する英国とフランスが登場していました。一方の英国は独自の「国教会」で、しかもElizabeth I世の当時はプロテスタント。他方当時のフランスではユグノーの弾圧。Arthur Brookeの溺死もそういった当時の情勢に関係がありました。そう考えてみると、我々の二つのΓ型が英国とフランスの2教会を表していることがわかります。では一体どちらのΓ型がどちらの国の教会なのでしょうか。ここで今まで言及されずにいた文字「六」に充てたFに注目しましょう。このFによって下段のΓ型をフランスの教会と見なすならば、上段にも英国を表す文字があるはずです。こうしてElizabeth 朝当時の英国、つまりEnglandを表す文字として第2列の「五」＝E が得られます。

こうしてテキストに出現した二国を眺めると、大きな空白が海峽を表していることにも気づきます。『薔薇の封印』では e が Francis Bacon、Elizabeth I 世、親子の絆、梨の実 として登場しました。梨といえばテキスト中にも「梨」という文字が登場します。E || e に該当する「五」と「梨」が、テキストの中心に関して点対称に配されています。この配置が作者の意図したものであることは、二つの F もまた同じ位置関係にあることからわかります。F || F なのです。e || 梨 のはずであり、つまりテキストの「梨」は、梨の木ではなく、梨の実のほうです。実際、「梨」の左となりは「杯」であり

「杯」||「不木」↓「非木」||「木ではない」

となります。「不」↓「非」というのは、かなり乱暴です。『薔薇の封印』の hand ↓ arm と foot ↓ leg と同様に考えれば、「ど」か他に同様の「不」↓「非」という符合があるはずですが、



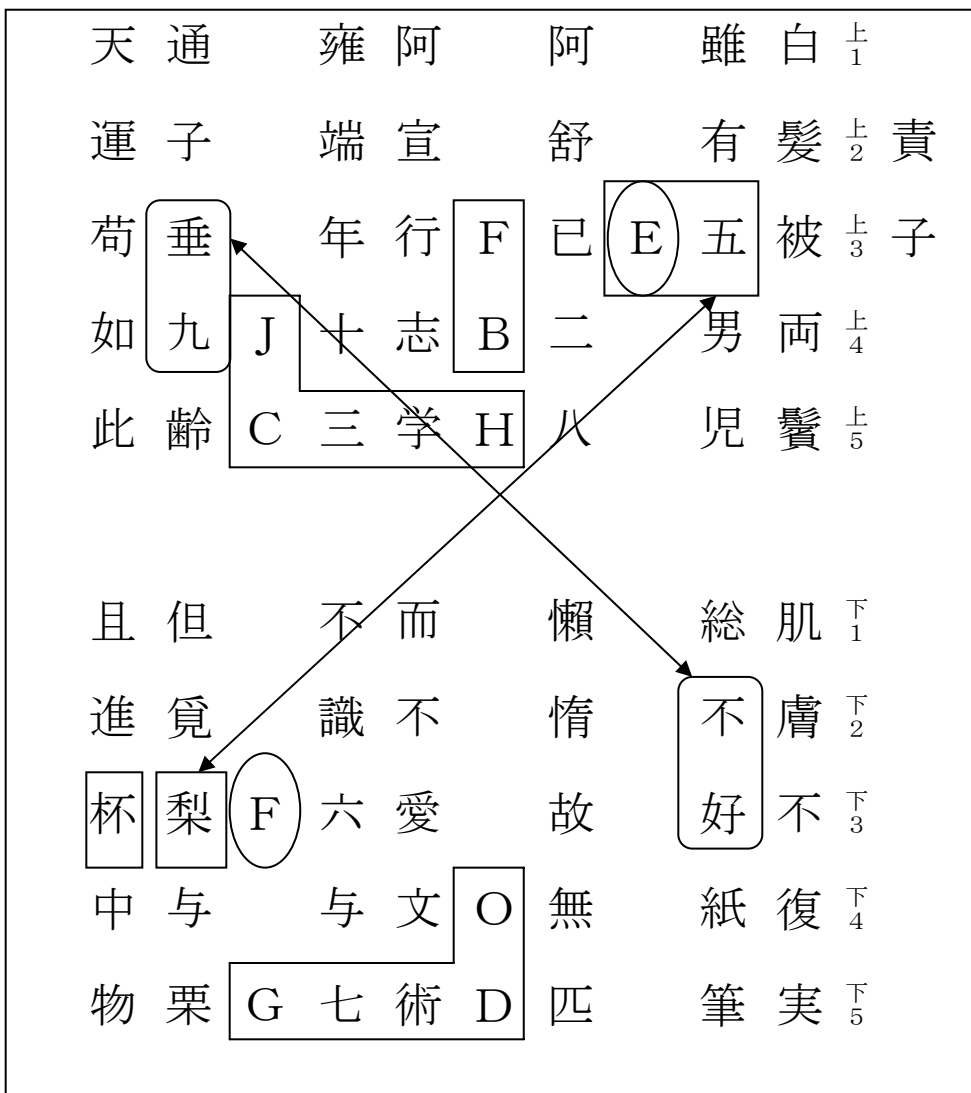
この時点で、テキスト中に見えている数のうち、まだ言及のないものは「九」のみです。当然「九」|| I のはず。しかし、テキストの中心に関して「九」と点対称な位置にあるのは第2列の「不」。これはどうにも符合しません。「九」|| I のすぐ右となりが「十」|| J です。J は歴史的には、まっすぐな I を曲げてできた文字でした。このことから

「垂九」 || 「上から下へたれさがるI」 ↓ 「まっすぐなI」 || 「I」

に気付きます。「垂九」と点对称の位置に配されているのは「不好」。

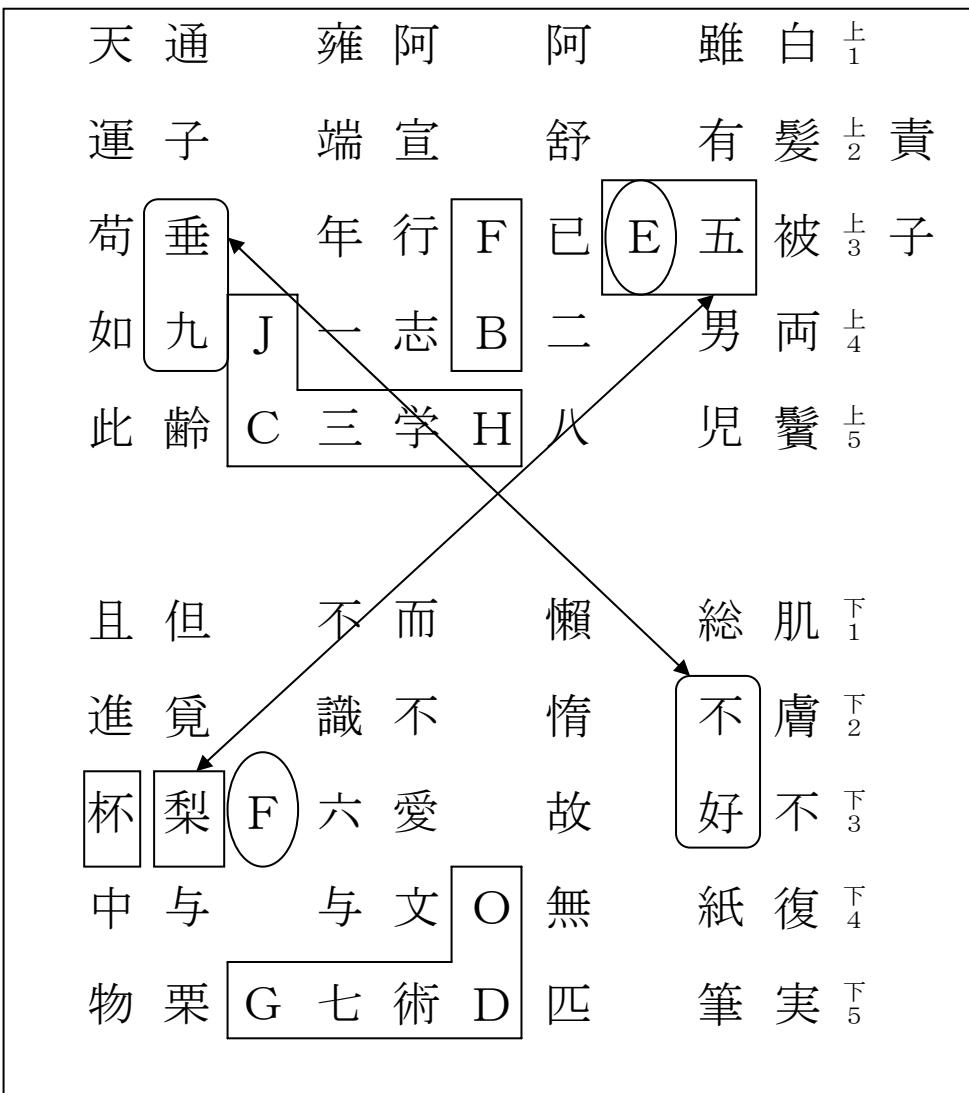
「不好」 || 「不女子」 ↓ 「非女子」 || 「女性ではない」

と解すことで、先の「杯」 || 「不木」 ↓ 「非木」 || 「木ではない」と符合します。ではなぜ「垂九」 || 「まっすぐなI」 || 「I」と「女性ではない」とが符合するのでしょうか。「女性ではない」は、『薔薇の封印』の *We gat no M* を思い出させます。つまり I (私 || Francis Bacon) は男性であるので、Elizabeth の王位を私が継承するのが当然なのだ、ということ。そしてわざわざ「まっすぐな」と強調しているのは、王位を継承すべきは「曲がった」J (|| James I 世)ではなく、まっすぐなこのI (私 || Francis Bacon) だ、ということ。『薔薇の封印』によれば、James I 世の即位後の Francis Bacon は王位継承を考えてはいなかったわけですが、ここでの「責子」の作者は「王位継承を議論 Francis Bacon」になりきった、おどけた口調になっているのです。以上で文面に現れた数は全て一通りは解読されたこととなります。



では次に「十三」 ↓ 「二三」によって得られる、幻影のような「一」について考えましょう。「一」

を、それがあるべき「十」の位置に据えてみましょう。



最終段階では、視点を少し大きくして眺めることとなります。「一」を含むテキストの句は、上段の「垂九」を除いて追うと、「通子齡」＝「子の齡(よわい)に通じる」となっています。「雍年一」によって、Francis Bacon の死亡の年が解るといふことでしょうか。

テキスト中、FB＝Francis Bacon は JCH＝Jesus Christ を含む「型」の上に位置しています。『薔薇の封印』において Jesus の上に配されたのは Elizabeth Tudor の霊魂を表す e でした。同様に FB のこの配置を、Francis Bacon が死亡している状態とみなしてみましよう。Francis Bacon は二度くなくして「注意」をしよう。Shakespeare の死亡が 1616年。そして本筋の Francis Bacon の死亡が 1626年です。FB の右となりに注目しましょう。以前にこの箇所において第3列の計である26が

已十二八十四六十六十六四二十六

として計算されたことを思い出しましょう。つまり「二八」＝「十六」＝「一六」です。すると第3列は

「巳二八」 || 「六十六」 || 「六一六」

ということになります。『薔薇の封印』では1616年はPyearpつまり16の連続として示されています。全く同様に「雍端年一」 || 「端の年一をふさげ」によっても

「巳二八」 || 「六十六」 || 「六一六」 ↓ 「二六一六」 || 1616年

となります。「巳二八」の箇所は、「阿舒巳二八」つまり「ああ言ってしまった『巳二八』です。

「阿舒巳二八」の対称位置には「一」を「六」に繋げるこの操作へのヒントとして、

「不識六与」 || 「不識六与・・・」 || 「六と、それと何だろうか？」

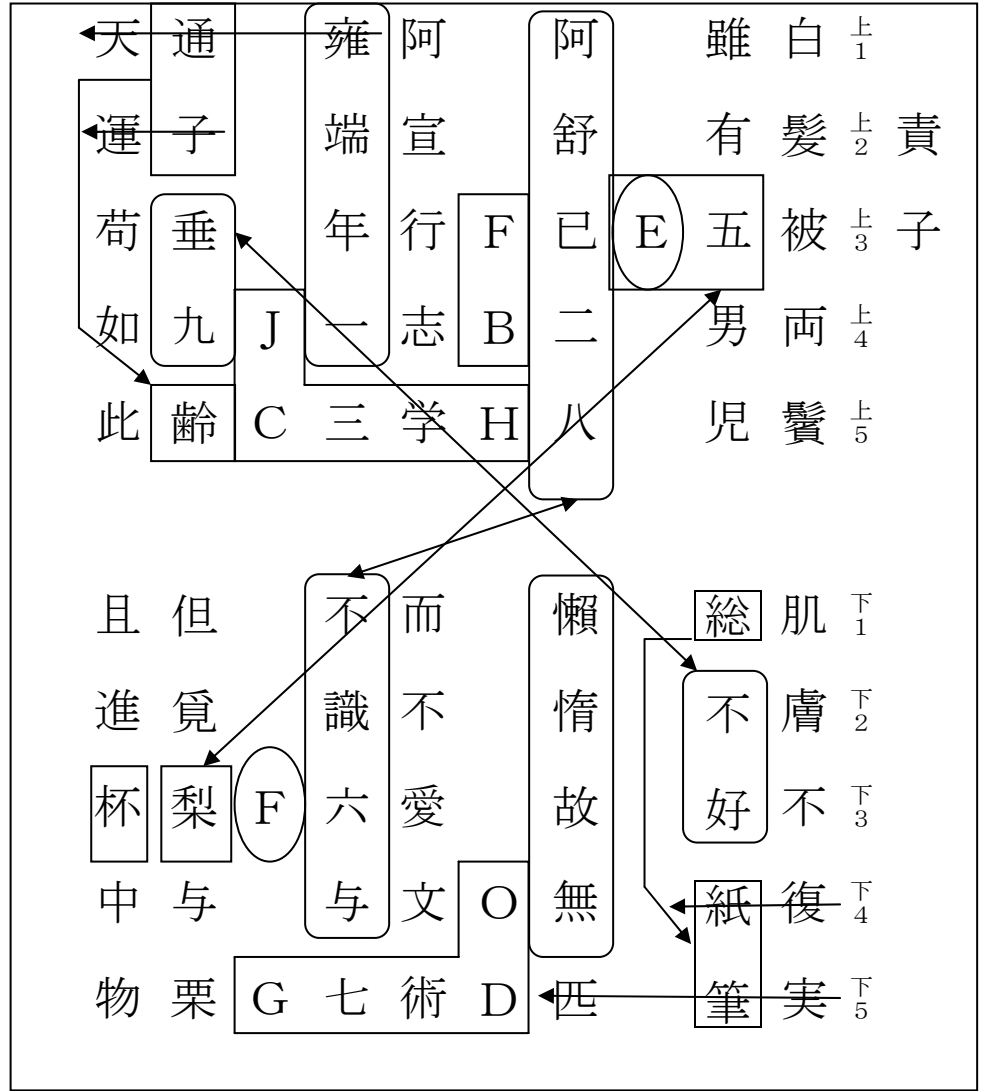
となっています。「不識六与」については、続く「七」は「型」に取り込まれているため、「六与」までに注目するわけです。

「雍端年一」の対称位置は、「懶惰故無」、つまりShakespeareが1616年に消えたのはFrancis Baconが執筆を「怠けたかったから消滅させたのだ」というのです。「責子」作者はこどもも相変わらぬFrancis Baconになりきった、おどけた口調です。

今度はShakespeareとしてではない、本当のFrancis Baconの没年を捜しましょう。先程の「巳二八」を、二×八 || 十六 というかけ算をせずに、素直に「巳二八」 || 「六二八」と見なし、さらに「雍端年一」 || 「端の年一をふさげ」を施すと

「巳二八」 || 「六二八」 ↓ 「二六一八」 || 1628年

です。この1628年というのはFrancis Baconの没年から2年後です。我々のテキスト中でのFrancis BaconはFB || 「巳二」です。「巳二」 || 「すでに二」。つまり1628年時点では「すでに二」年経っている、とどうかたちでFrancis Baconの没年である1626年が記されているのです。こうしてShakespeareとFrancis Baconの没年は、同一箇所に記されたこととなり、彼らが同一人物であることが強調されます。そしてその原因となった「通子齡」の対称物は、「総紙筆」、つまりは全著作です。これは、『薔薇の封印』のall idemと符合します。



さらに、「総紙筆」の「紙筆」の字付近をみると、

「実筆匹復紙」

となっております。「実筆」つまり自筆の原稿が、「復紙」つまり「代書屋に清書させて仕上げた紙面」に匹敵する、それほど間違いが無く完璧なものだった、ということ。「復紙」という成句は聞いたことがありませんが、**Shakespeare** の自筆台本が間違いが無い完璧なものだったということが有名ですので、「実筆匹復紙」をこの様に解することは容易です。さらに「実筆匹復紙」と点対称に位置するのは、

「雍通天子運」 || 「天子に至る運をふさぐ」

です。これは **Francis Bacon** が即位しなかったことと符合します。

『薔薇の封印（数学のいずみ）版改定第3版』では、**James I** 世の即位後の **Francis Bacon** が王位継承を考えてはいなかったということが、イタリア半島の形を得る際に用いられたイドラ消去の操作 (14—30) において判明したわけです。「雍通天子運」という同様の結果を得た今、

この「イドラの除去」と同様の操作を行ってみましょう。つまり、アルファベットを意識した現段階の解説において、今までに使用した文字すべてを消去するのです。残ったものは次の通り。

	上1	責子			
	上2				
	上3	白髮被			
	上4		両鬢		
	上5	雖有男児			
				下1	
				下2	
				下3	
				下4	
				下5	
阿宣行志			而不愛文		
苟如此		但覓	与栗		
		且進	中物		

この残骸を通常の順序で追おうとすると、「肌膚不」の「不」でつかえてしまいます。

「但覓 与栗」

についても、「覓」に続く文字が欠けたため、意味を追うことができません。最初の「肌膚不」から解決していきましょう。「肌膚不」でつかえたことは、「肌膚不」に続いていた文字「復実」に注目させます。ここで前述の

「杯」|| 「不木」↓「非木」|| 「木ではない」

を思い出しましょう。我々の「梨」は「非木」であり、つまりは「実」だったわけです。このことを手掛かりにして

「復実」|| 「(梨の)実をもとの状態に戻す」

と考えましょう。すると、

「但覓 与栗」↓「但覓梨与栗」

となりますが、肝心の「肌膚不」については、つかえたままです。これはどういうことでしょうか。これには『薔薇の封印』で行われた「復実」がヒントになります。『薔薇の封印』の「復実」

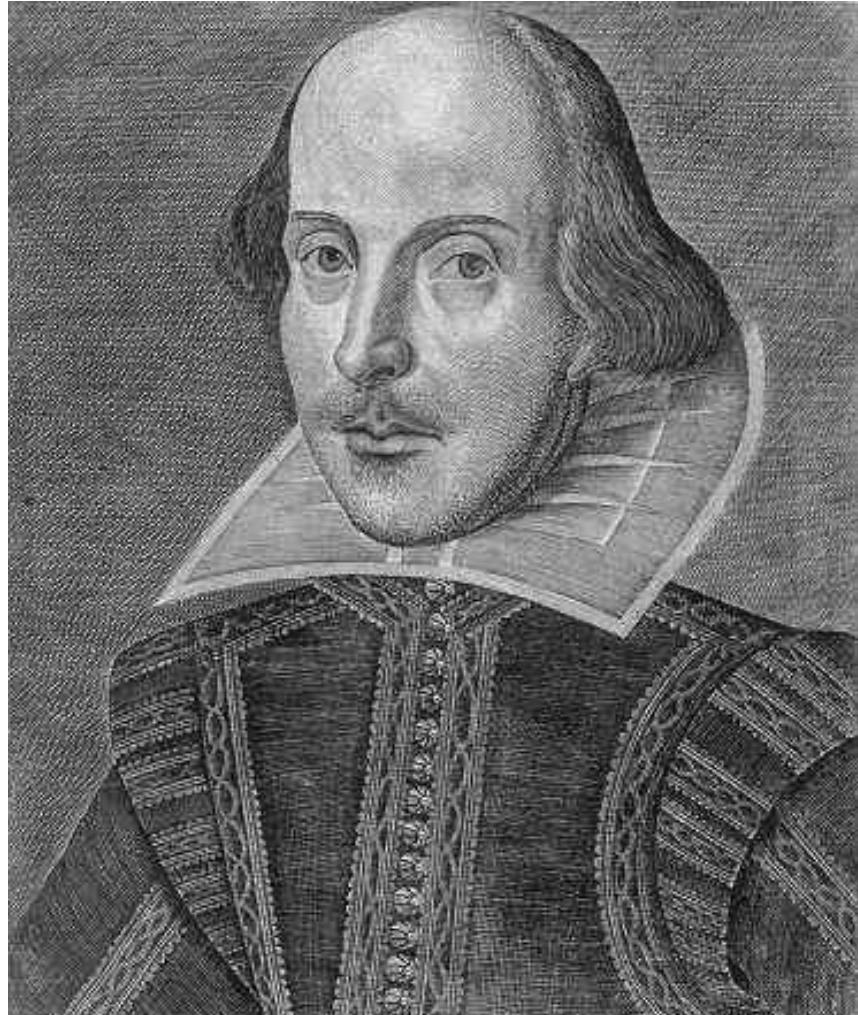
だから、全部がむき出しの頭皮ではないのだ」ということです。くだけた言い方をすれば、
白髪被両鬢

肌膚不総

白髪が両鬢を被っている

完全に禿げているわけじゃない

です。とてもふざけた内容ですが、これは Shakespeare の *first folio* の表紙の肖像画に見事に一致します。*first folio* については、以前の解説においても「三通」という形で言及がありました。



雖有男児

阿宣行志

男の子がいたのに

ああ、志を宣言し、実行した

これはどうみても母親 Elizabeth Tudor のことです。志を宣言するというのは、有名な「国家と結婚する」というものでしょう。続く「而不愛文 但覓梨与栗」はどういう意味でしょう。

Elizabeth Tudor が「文を好まず、ただ梨と栗とを求めた」わけはありません。前出の通り「栗」↓「慄」と解した上で、「但覓梨与栗」↓「但覓梨之与慄」ととらえましょう。つまり

而不愛文

但覓梨与栗

そして文を好まずに

ただ芝居のスリルを求めた

Elizabeth Tudor がたいそうな教養人であったことは有名です。「文を好まず」というのはどういうことでしょうか。これはつまりは、演劇の鑑賞はしたが台本は読まなかった、ということでしょう。つまり直接に台本を読んでいけば *Et tu Brute?* の真意が伝わったはずだ、ということ

苟如此

且進中物

とりあえずこんなところであるのなら

中の物を進めるとするか

「中の物」というのは、二つのΓ型の中のもの、つまりは学問と宗教です。「中の物を進める」というのは、Francis Bacon が学問と宗教に関する大きな仕事を成し遂げたことを、Francis Bacon になりきった、おどけた口調で語っているわけです。

白髪被両鬢

肌膚不綰

雖有男兒

阿宣行志

而不愛文

但覓梨与栗

苟如此

且進中物

白髪が両鬢を被っている

完全に禿げているわけじゃない

男の子がいたのに

ああ、志を直言し、実行した

そして文を好まずに

ただ芝居のスリルを求めた

とりあえずこんなところであるのなら

中の物を進めるとするか

これでは「子を責める」のではなく「子が（親を）責める」ようなものです。Francis Bacon になりすました「責子」の作者は「責子」という題名にまで、パロディーを施してしまっています。ここまで無礼講が過ぎると「阿舒」が最後に続かないことが疑問に思えてきます。現時点のアルファベットによる解説にあつては、「阿舒」は「阿舒巳二八」として配されていました。なぜ極端な無礼講ではなく「巳二八」の前に「阿舒」を配したのでしょうか。それはこれほどの無礼講よりもさらになお、「阿舒」としなければならぬ重要な事項が「巳二八」に記され

ているからだ、と考えるべきでしょう。前出の Francis Bacon の没年を読み取った箇所を再掲します。

「巳二八」＝「六二八」↓「一六二八」＝1628年

です。この1628年というのは、Francis Bacon の没年から2年後です。我々のテキスト中で Francis Bacon はFB＝「巳二」です。「巳二」＝「すでに2」。つまり1628年時点では「すでに2」年経っている、というかたちで、Francis Bacon の没年である1626年が記されているのです。

このことと「巳二八」の重要性を重ね合わせると、つまりは「**責子**」が**1628年に作られたという**とが「阿舒」であったのに違いないと、ようやく気付くのです。

天才の卓抜の暗号技法と、『薔薇の封印』との完璧な符合は、このレポートの著者から、結びの言葉などというどうでもよいものを記す気力を見事奪い去りました。阿舒。